

[発行日]=1999年12月21日

[本文]

蛇に噛 (か) まれて入院したイレネが、包帯がとれるや否や、蛇講座を開くことになった。

彼女は蛇をたくさん飼っており、生態をつぶさに写真に撮っている。そのスライドを学校で上映するという企画なのだが、当日は子供たちもたくさん来た。この学校には、子持ちの生徒が多い。赤ちゃんもいる。

実際に蛇を抱かせてみる、などというアトラクションもあった。私にも抱いてみろと言う。「私は、別に……」というそぶりを見せると、大きな目でジロリとにらみ、蛇を差し出す。蛇ににらまれた蛙 (かえる) の気持ちがわかる気がした。抱いてみると、ヌルヌルした感触ではない。スウェーデンの乾燥した気候のせいなのか、湿っぽい感じが無い。上質の革ベルトのような滑らかな手触りだった。

スライドを上映しながら、あれこれと説明を加える。会場からは頻繁に質問も飛ぶ。また、その質問が長い。この国の人、よくしゃべる。蛇が大きな獲物をひと息にのみ込む時の、顎 (あご) の骨はどのように動くのか、というようなことを、わかりやすく図に書いてみせる。獣医さんというよりも動物学者といった方が似合う感じである。

会場の雰囲気は堅い感じはない。机も椅子 (いす) もバラバラで、小さな子供たちはウロウロしているし、床に寝そべっている人もいれば、ガムを噛みながらしゃべっている人もいる。ドアは出たり入ったり、始終バタンバタンと音がしている。実は、学校の授業の時も、ほぼ、こんな感じである。小さな子供が、こんなにウロウロしていないだけの違いだ。最前列の女の人が、ドーンと机の上に足を置いたまま、先生に質問をする。こちらでは、そんなことを誰 (だれ) も気にかけない。また、質問のやりとりの中に、巧みにユーモアが挟まれる。日常的な会話も教室も、同じようだ。

イレネの蛇講座は、中休みを挟んで三時間に及んだ。帰りたい者は帰るので、講師はやりたいただけやる、ということだろう。

後日、秋休みにフォトスタジオでワニと蛇の写真を撮っているというので覗 (のぞ) いてみたら、ワニは五十センチくらいの小さなものだったが、蛇がなんと人間の太股 (ふともも) よりも数段でかい巨大な蛇で、しかも二匹いる。体に巻くと、イレネが隠れてしまう。

ワニの口を大きくこじ開けて、泳ぐ時に水が入ってこない仕組みを説明してくれたが、彼女の足元を見ると、血がポタポタと床にしたたり落ちている。この人の部屋には招待されたくないもんだと、その時思ったが、好きな人には、たまらないオタクワールドなのだろう。Tシャツにも蛇がプリントしてある。

それにしても、彼女は学校の寮に住んでいるが、これらのペットと一緒に暮らしているのだろうか？ 別棟に居るので知らなかったが、自分の部屋の中だけに、とどめておいてほしい。陶芸科の教室で、蛇やワニを放し飼いしないで下さいね、イレーネさま。